

更級の旅

44

江戸幕末から明治初めにかけて、当地を世に知らしめる貢献をしたお二人の交流を示す掛け軸がありま
す。お二人というのは、一
人は羽織などの高級品に使
われた織物「更級斜子」の
考案者であるお政さんこと、
塚田政子さん、もう一方は
佐良志奈神社から上山田地
区に崖沿いを走る「明治新
道」を切り開いた、芝原地
区生まれの中村林左衛門さ
ん。お政さんのご子孫であ
る羽尾地区在住の塚田重晴
さんのお宅に、その掛け軸
が伝わっています。

▽現金収入もたらす

和服に使われる着物の織
りの基本は、縦横それぞれの
糸を二本並べて織るもの
ですが、斜子は二本より多
く並べて織りました、織り
目が普通の着物より大きく
魚の卵のように粒だつて見
えるところから「魚子」と
も書かれます。少し厚めの
生地になつて織り目が浮か
んだり沈んだりという変化
があるため、浮かんた部分
には光が反射してキラキラ
する感じがします。

斜子にはまた、生斜子と
練斜子の二種類があります。
生斜子は縫った糸をそのま
ま使いますが、練り斜子は、
糸を一度、お湯で煮て、そ
の糸に葛などの糊をつけて
織ります。最終的にはぬる
ま湯で糊抜きをするのです
が、これによって布面はふっ
くらしなやかで光沢がでるのだそう
です。更級斜子の多くはこの練斜子で、
かける手間も多いので高級品でした。

掛け軸に残る江戸の偉人の交流

この技術を考案したが寛政十年

（一七九八）生まれのお政さん。十代
ころ、自宅を訪ねてきた男性の着物が
きれいだったので、切れ地を分けても
らい、仕組みを解明したとされます。
斜子という織り方は江戸時代前に始
まつていましたが、技術は全国には広
まつていなかったようです。この男性
が着ていたものが斜子織りだったと考
えられ、お政さんはその切れ地の織り
方を研究し、地域の人たちに教え広め
たのです。

やがてお政さんの住む羽尾だ
けでなく、芝原、若宮、須坂に
も普及して旧更級村一帯をうる
おしました。絹糸を生み出す蚕
は、それまでは畦や山に植えて
いた桑の葉をえさにして細々と
育てていましたが、田畑にも植
えるようになり、大きな現金収
入になつていったと、お政さん
の功績を明らかにした郷土史家
の塚田哲男さんはおっしゃって
います。（更級斜子についてさ
らに詳しくはシリーズ七回目を
ご覧ください）

▽動脈をつくる

中村林左衛門さんはお政さんより七
年遅い文化二年（一八〇五）の生ま
れ。更級地区と上山田地区は八王子山
の万治峠越えでしか行き来できなかつ
たため、林左衛門さんが発起人となつ
て多くの年から寄付金を集め明治八年
（一八七五）、八王子山の崖の開削に取
りかかり、三年後の明治十一年に開通
しました。明治になつてできた道なの
で「明治新道」と呼ばれました。

ご子孫の中村亀幸さんご夫妻（写真
右）にお話をうかがいました。中村さ
んのお宅は江戸幕末、蚕の卵、いわゆ
る蚕種をつくっていました。絹糸と蚕
種が海外への輸出品の代表格で全国的
に養蚕が花形産業だった時代です。お
政さんが技術を考案した更級斜子も当
地で育った蚕の吐き出す糸がもとに

なっているのです。お政さんの影響も受
け、蚕の飼育を盛んにするようになつ
ていたかもしれません。

蚕のえさとなる桑の葉を栽培する畑
が八王子山を越えた上山田地区にあり、
林左衛門さんは子どものころ父親の甚
右衛門さんと一緒にかごを背負つて芝
原地区との間を何度も行き来していた
そうです。畑を遠くにつくつていたの
は、桑の木が病気になるように、あ
えて遠くにつくる必要があったからと、
亀幸さんはおっしゃいます。

林左衛門さんは学問が好きで、長じ
ると各地に旅をします。年をとつてか
らふるさともどり、寺子屋を開き、
当地だけでなく更級、埴科両郡域の人
たちに読み書きや倫理、道徳を教えま
した。そして七十歳の晩年、子どもの



ころ桑の葉取りに八王子山の峠越えを
していたとき父親の甚右衛門さんが
言っていた言葉「この峠の下におまえ
たちが道を開いてくれ」を思い出し、
一念発起しました。峠は険しい坂道の
ため足を踏み外しけがをする人もいた
ことから、けが人を出さないためにひ
と肌脱ぐのを決意したと考えられます。
若いころに甚右衛門さんのおかげで
旅ができたので、恩返しの意味もあつ
たのでしょう。林左衛門さんを発起人
とするこの一大プロジェクトはその後、
更級郡の産業振興に大きな貢献をしま
す。バス会社の川中島バスが運行を
始めた路線の最初が、善光寺と戸倉上
山田温泉をつなぐ県道上山田線、大正
十五年（一九二六）のことでした。車
という新しい大量輸送手段を活用でき
る動脈をつくってくれたわけですね。

十九世紀、江戸時代後半になると、

現金収入をもたらす商品作物の栽培が
盛んになり、庶民の暮らしもだんだん
豊かになってきました。その流れの中
で、お政さんは更級斜子を地域の産業
に発展させる役割を担い、林左衛門さ
んは更級斜子を含めた地域の産物や観
光客を大量輸送できる道をつくりまし
た。地域起こしの功労者です。

亀幸さんご夫妻の手前にある文書は、
林左衛門さんが各地を旅した際に立ち
寄った神社仏閣のご朱印帳などです。
北海道から九州までその歩いた地域の
広さに驚きました。見聞の広さがうか
がえます。

▽大事業を終えて

お政さんと林左衛門さんの交流を示
す掛け軸についてです。左の写真がそ
れです。正座して書物を読んでいる肖
像画がお政さんです。最上部に大きな
文字で、「経文を読誦なす身のありが
たや花の浄土の蓮へおもむく 七十九
歳 まさ女」と書かれています。お政
さん自身の書でしょうか。お政さんが
七十九歳のとき、生来学問好きだった
その人生を、お経を読む姿に描いたの
だと思われます。

そして、その歌と肖像画の間、左か
ら右に斜め六行にわたつて書き込まれ
ているのが、林左衛門さんの和歌です。
これも林左衛門さんの自筆と思われま
す。和歌は――

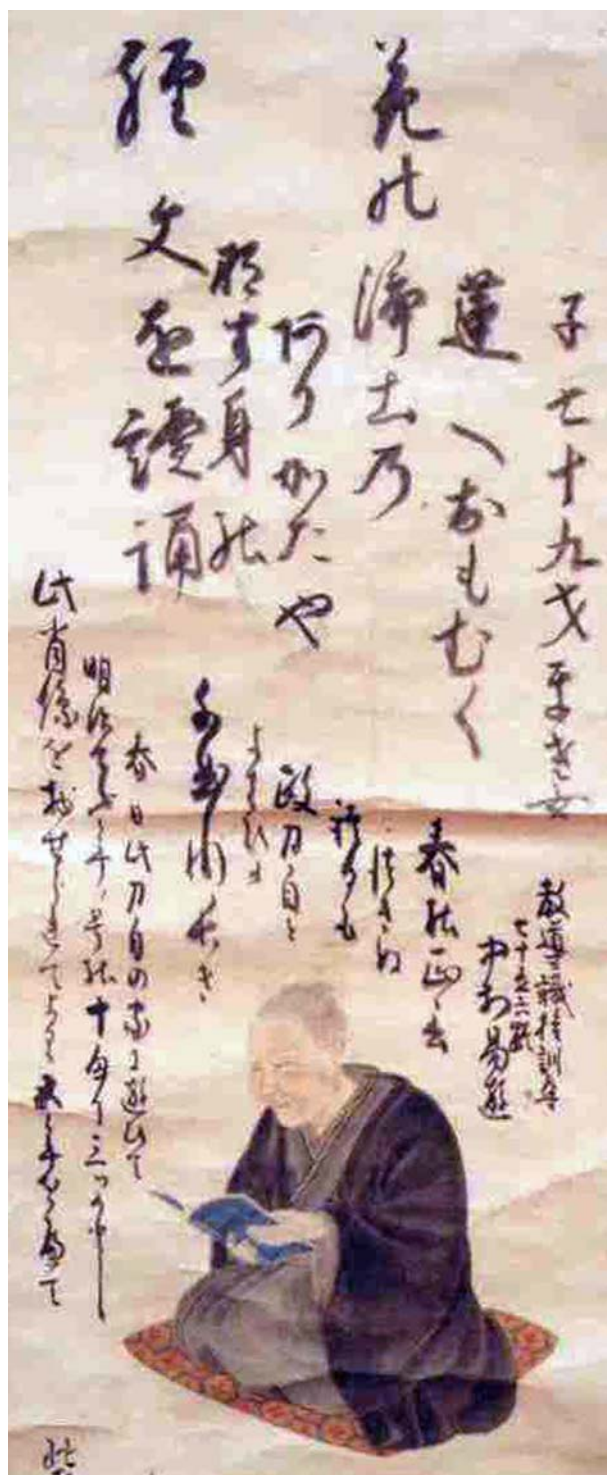
〈千曲川長きよわひの政刀自と語るも
つきぬ春の正言〉

この歌の左側には明治十三年
（一八八〇）、春の日にお政さんの家に
遊んだときに――という言葉も添えられ
ています。とすると、お政さんは林左
衛門さんが訪ねてきたとき八十二歳。
林左衛門さんはお政さんの長寿を千曲
川の流れにたとえ、お政さんとなつづ
り歓談したのでしょう。「正言」という
のはたくさん砂をいう「真砂」をイ
メージした掛け言葉かもしれません。

林左衛門さんはこの歌を書き込んだ
ときの自分の年齢を七十六歳と記して
います。私はこの七十六歳という年齢
に注目しました。明治新道の開通時、
林左衛門さんは七十二歳なので、林左
衛門さんは大事業を成し遂げた後、芝
原から羽尾のお政さんの家を訪ねたこ
とになります。

春の陽気のいい日だったのでしよう。
語り合ったその場ではどんな話が交わ
されたのでしょうか。更級斜子、明治
新道というお互いのなした仕事を楽し
く振り返っていたかもしれません。更
級村初代村長となる塚田雅丈さんはこ
のとき三十三歳。当時は羽尾村の戸長
なので、お二人に同席していた可能性
があります。

お政さんはこの二年後の一八八二年、
林左衛門さんは五年後の八五年に亡く
なりました。更級村の誕生は両偉人の
春の歓談から九年後の一八八九年です。



発行 二〇〇六年十一月十九日

編集 さらしな堂



（代表・大谷善邦）

〒三八九・〇八二三

長野県千曲市大字若宮二一八四・六
（旧更級郡更級村）